

『なぜ勉強するのか？』

子どもから、「なぜ勉強しなくちゃいけないの？」という問いを投げかけられた経験は、どんなにもあるのではと推測いたします。これから述べることは、あくまでも私の狭く乏しい経験からのものであり、「そういう考えもあるよね」程度で留めておいて欲しいと思います。

端的に言えば、「自分の力で生きていくため」と押さえています。これは具体的には、どういうことかと言えば、①人の話が理解できる。②書いてあることが読めて理解できる。③自分の気持ちや考えをそれなりに伝えることができる。④ある程度の計算（たす、ひく、かける、わる）ができる。以上のことができると、ほぼ支障なく世の中で生きていけると思っています。

例えば、買い物とか、料理とか、家電を使うとか、公共交通機関を利用するとか、旅行とか等々。（なお、情報活用能力とかPISA型読解力とかは置いときます）

上述の①～④の資質・能力は、小学校の4年生までの段階でほぼ育成されるものと押さえています（あくまでも私個人の捉えです。小学5年以降は、質的に肉づけされ、より高度な状況に対応できる資質・能力の育成と思っています）。ですから、小学校の低・中学年の勉強はとても大切なのです。生涯にわたって必須であり機能するのです。やる気を持って、必要感を持って、一生懸命に打ち込み、確実に身に付けることが大事です。落ちがあってはならないのです。裏を返せば、教員や保護者が、子どもに「やる気」を持たせ、頑張ろうとする環境を整えることが必要不可欠になるのです。

さて、①～④の資質・能力は、ある意味、日々の生活を営む際の基本的な術に当たると思っています。その術を安心して使えるための前提があります。「食・住・衣」が確保されていることです。そのためには、「お金」が必要になります。これは、命を維持するための、そして、人間の尊厳を保つためにも、絶対必要なものです。「自分の力で」は、言い換えますと「自分で稼いだお金で生活に必要な物やサービスを相応に購入できる」ということです。

稼ぐためには、何らかの仕事に就き、収入を確保します。この「仕事に就く」ために、勉強で身に付けた資質・能力が活かされますし、求められるのです。ですから、生涯にわたって生きていくために使える術としては、小学校4年生段階までの資質・能力で私はいいいと思うのですが、「仕事に就く」ためには、それ以降の学年の勉強が必要になります。現実的には、日本では多くの場合、高校卒業の資格が少なくても必要になります。

高校卒業の資格を得るためには、まず試験に合格して高校に入学しなければなりません。この関門を突破するために、小学校高学年さらに中学3年間での勉強を頑張り、必要な資質・能力を身に付けなければならないのです。この段階になりますと、当面の勉強の目的は、「高校に入学するため」になります。そして、仕事の種類や内容によっては、大学卒業の資格が求められます。したがって、大学に入学できるだけの資質・能力を身に付け、試験に合格し、入学後もしっかり勉強して卒業に必要な「単位」を取得するのです。

人生を楽しむとか豊かなものにするという考えは大事です。勉強は、結果として、これらのことに寄与します。ですが、その前提である「命や人間の尊厳を保つことができている」ことが最も大事なことなのです。この前提を成立させるために、勉強が必要なのです。

「自分で稼ぐ」や「経済的自立」が、私にとって、生きていく上での最優先課題でした。理由は、私の育った環境にあります。またまた私事に触れ恐縮しますが、私は生まれて半年後から事情があって祖父母（明治生まれです）の下で育てられました。祖父母にとっては、私は孫（長男の子）になります。

私は、祖父母に育てられたことは、実に幸運なことであったと思っています。本当に大事にしてくれました。惜しみなく愛情を注いでくれました。優しく温かく時に厳しく育てられました。かなり年の離れた兄（叔父）や姉（叔母）たちも、とてもかわいがってくれました。

祖父は、自転車店を営んでいましたが、私が小学校高学年の頃、一緒にやっていた三男に譲りました。当時の収入は（私の記憶の限りですが）、貸間業と若干の貸店舗から得る家賃（極めて良心的で安かったと記憶しています）のみ。何とかかんとかの生活だったと思います。中学3年の春に、祖父は「うちの子どもになるか？」と訊いてきました。私は「うん」と即答しました。それまで祖父母は「この子は、実の親と暮らした方が良いのでは」と随分悩んでいたそうです。

祖父は、その年の秋に入院。末期の胃がんでした。余命3か月の診断。今、思うと、自分の死期を悟り、養子縁組を決断したのかもしれないと想像しています。祖父は、翌年3月、私の高校合格を見届けた後まもなく他界しました。

その後、高校・大学の7年間、祖母と二人で暮らしました（もちろん、兄や姉たちは、折に触れ顔を出しています）。自分に関する経済的な負担は最小限に留めました。大学（自宅から通えました）の授業料は、ほぼ、奨学金とバイト代で賄いました。

中3最初の進路相談時には、担任の先生に「学校の先生を目指します」と伝えました。そして、最短コース（経済的負担も最小限で）を選択し、とにかく教員になり「自ら稼げる」ようになることを目指しました。私にとって、勉強は「自分の力で生きていく」ための手段でした。初任給を頂き、祖母に初仕送りできた時は感慨深いものがありました。

私の学童期から大学を卒業後の数年の期間は、ちょうど日本の高度経済成長期と重なっています。世の中、景気が良く、「頑張れば、明日はもっと良くなる！」という希望が持てた時代でした。勉強も、それなりに頑張ればなんとか食うには困らなかったように思います。

今は、苦勞して身に付けた知識や技能が早々に通用しなくなる時代だと言われています。技術革新などで、次々と新しい技術や機能が登場し、それらに対応していかなければならないからだと思います。優れた技術は、諸刃の剣でもあります。人間が担ってきた仕事を奪うからです。

何やら悲壯感が漂ってきましたが、勉強の大事さは不易です。まずは、できるだけ早い段階で勉強する癖をつけることが大事だと考えます。勉強は、新しいことへの挑戦でもあります。その努力が全て報われるとは限りませんが、何らかのチャンスを得るとか、何らかのスタートラインに立てる権利を得るとかに有益に働くものと思っています。